



## 難病患者に光を届ける科学者。 いま挑戦の先に見えてきた新薬。

Special  
INTERVIEW

# 山野嘉久

聖マリアンナ医科大学 大学院 先端医療開発学 教授  
難病治療研究センター 病因・病態解析部門 部門長

### 単なる憧れだった医者の世界 何でも治すブラックジャックのように

もし、自分が原因不明の病気に罹ってしまったら——。有効な治療薬も見つからず、ただ絶望感を抱きながら、日々進行していく病気に苦しんでいく——。

医療の進歩は著しいが、世界には原因不明で治療が難しい「希少難病」と呼ばれる病気が、いまだ数千種類も存在すると言われている。患者数が少ないため、病気の原因解明や研究がなかなか進ま

ないのが現状だ。

聖マリアンナ医科大学難病治療研究センターの山野嘉久教授が取り組む、「神經難病HAM (HTLV-1関連脊髄症)」も希少難病のひとつだ。神經難病HAMとは、HTLV-1というウイルスが原因で起こる病気で、両足の麻痺やしづれ、痛み、排尿排便異常をきたし、進行すると車いす生活や寝たきりになってしまう場合もある。現在、日本に約3,600人、再発性軟骨炎に至っては約400人しかいない難病だ。山野教授は、この病気に苦しむ患者さんに寄り添い、ともに闘っている研究者。



患者さんの  
幸せをまず考える。  
恩師の姿に、  
ドキッと  
させられました。

そして今、世界初のHAM治療薬を生み出そうとしている。

もともと両親も親戚も医療関係者ではなく、九州南端の鹿児島で育った山野青年にとって、医師は「弱き者を救う、憧れの存在」だったという。成績優秀で高校は県トップ3に入る県立鶴丸高校。

同級生の多くが地元の鹿児島大学を受験する中、山野青年も同級生と一緒に医学部をめざした。塾も通わず、学校の勉強にひたすら打ち込み、見事、鹿児島大学医学部に合格した。

「当時は医者といえば、何でも治すイメージを持っていました。そう、僕の中ではブラックジャックでしたね」

難病治療研究の最前線に自分が立つとは思ってもみなかつた。

### 海外の論文雑誌で 知ったHAM 大学時代は 離島医療も体験

きっかけは大学時代。入学当初はバドミントンなどのスポーツにも挑戦し、友人たちと共にキャンパスライフを謳歌していたが、専門課程に進むにつれ、医学を勉強することがとても面白くなった。「とにかく時間さえあれば、片っ端から医学書を読んでいました。知らないことを知る。医学の奥深さに目覚めた頃でした」

中でも「クリニック・パソジカル・カンファレンス」という臨床病理を勉強するクラブには熱心に顔を出した。米国の論文雑誌に掲載された症例記事を教材に、仲間とディスカッションを重ねた。そのとき教材で取り上げた症例のひとつとしてHAMに出会った。

HAMは、1986年に鹿児島大学医学部の納光弘教授らによって世界で初めて発見された。HTLV-1ウイルスがHAMを引き起こすことを明解にして以来、鹿児島大学は世界のHAM研究の中心的存在だった。「ぜひ、先生に会いに行ってみよう」。納教授の部屋を訪れ、HAMについてあれこれ質問した。何度も訪れていくうちに、研究を手



科学することが  
楽しい  
医者は想像以上に  
素敵な職業

研修医になって初めて納教授の回診に同行したときは今も忘れない。普通、回診といえば、患者さんのベッドサイドをまわり、検査データなどを見せながら、現状と今後の治療計画の説明をしていくが、納教授は違った。

「患者さんに『入院生活は幸せですか?』としか尋ねないんです。医学書ばかり漁って

頭でっかちだった僕はその言葉にドキッとした」

患者さんの幸せを一番大事にする。まさに医療の原点である。その後の研究活動も恩師のこの言葉に支えられてきた。

研究者として大きな転機となったのは、アメリカ国立衛生研究所(NIH)での3年間の留学経験だった。31歳のときである。

当時、HTLV-1ウイルスが脊髄の炎症を引き起こすことを証明するため、いくつかやらなければ



世界中から研究者が集まっていた  
アメリカ国立衛生研究所



留学中にお世話になった  
Dr. Steven Jacobsonと (2015年)

いけない段階があった。それを行うために山野教授はNIHへ申し出て、受け入れてもらつた。納教授も快く送り出してくれた。

NIHでの毎日はとにかく刺激的だった。

「世界中から集まってきた研究者に触れることで、より深く、より論理的に考え、アプローチすることの重要さに改めて気づかされ、医者として成長できました」

研究にどっぷり浸かった3年間だったが、日本に帰ってからは臨床に戻り、救急病院でのハードワークが続いた。研究とのギャップはあつたものの、不思議と焦りはなかった。さまざまな場面に立ち会い、「臨床の限界」も肌で感じることができた。

「やっぱり研究を進めて、より多くの患者さんを幸せにしなければ」

研究者としての使命感が沸々と湧いてきた頃、先輩の誘いもあり、聖マリアンナ医科大学へ。当初はリウマチ内科での短期間の臨床勤務の予定だったが、HAMの研究者である山野教授にとって同大学の研究施設は魅力的だった。

また当時、難病といわれていたリウマチに新薬が出てきて治療が飛躍的に進んだ。「難病も優れた薬があれば治る」という場面を目の当たりにし、意欲を掻き立てられた。

「自分もここで治療薬を開発したい」

納教授に相談したところ、「わかった」と送り出してくれた。退官を問近に控えた恩師への最後のわがままだった。

## もっと科学を深く学べる環境を 今後は下の世代の教育がミッション

こうして2007年から聖マリアンナ医科大学難病治療研究センターに勤務。関東初のHAM専門外来を立ち上げた。HAM患者の会の強い要望もあった。

最初は自分で診察して、患者さんに血液を提供してもらひ、診療終了後、それを研究室に持ち帰り、夜遅くまで一人で研究していた。

苦いエピソードもある。専門外来を開設してまもなく車いすのHAM患者さんが訪れた。彼女は20年前に医者に「20年経ったら車いすになる」と言われたという。一方で「10年もすれば、薬ができる」という話を聞いたという。20年が経つて、そのとおり車いす生活になった。しかし薬は出てこない。その人は言った。

「専門外来というけれど、あなたたちは何をしてくれるんですか?」

心にずしんと響いた。患者さんが研究の恩恵を実感できるところまで達しないと、意味がないことを改めて痛感した。

以来、他の医療機関ではやらないような臨床検査などを提供することを重ねた。

「難病の患者さんにとって、『医療関係者の無関心』が何より辛いことです。何とかしなければと私たちが動いている姿は、患者さんにとっても大切なことで、それは希望となり、QOL向上にもつながります」

こうした地道な積み重ねと患者さんとの信頼関係が実り、HTLV-1ウイルスに有効な薬の開発が着実に進んでいる。いよいよ2014年からは最終段階といえる治験(人を対象とした臨床試験)がここ聖マリアンナ医科大学で行われている。承認されれば、国内はもちろん世界のHAM患者が待望する新薬が実現する。

「ただ目の前の患者さんを幸せにしたい、という思いでこれまでやってきました」と語る山野教授。難病治療薬の開発。それはエヴェレストの頂上に登るほどの挑戦であり、成功である。

「ずっと追い求めていたから、巡り会えただけでしょう」

世界が注目する研究者は誠実で驚くほど謙虚だ。

「科学することが楽しい。だから頑張ることができるし、挑戦することができます。受験生の皆さんも医学を好きになってほしい。医者は皆さんのが思っている以上に素敵な職業ですよ」



## Dr. Yamano Yoshihisa

— 医師を志す人へ —



研究室のスタッフと一緒に。

大切なのは、好きであること。  
楽しいから、挑戦できる。